

「鬼のいぬ間に洗濯」ならぬ、ずるをしようとす輩は何処にもいる。インドネシアは漫画チックに“Kucing pergi, tikus menari.”(猫が何処かに行っている間にネズミが踊る = 上役がいなくて下の者が仕事をしない)という。

しかし、何処かの国には上役がいても堂々と仕事をしない下っ端役人がいる。世の中こんなもんだよと狭い世界でふんぞり返っている「井の中の蛙」、インドネシアでもやはり蛙に例えられる。ただし、すんでいる所は井戸の中ではなく、“Seperti katak di bawah tempurung.”(椰子殻の下の蛙)と椰子の殻の下。

何処の世界でもありがちなのが「あちら立てればこちら立たず、こちら立てればあちら立たず」。インドネシアでは架空の果物に例えて、“Bagai makan buah simalakama, dimakan bapak mati, tidak dimakan ibu mati.”(buah si malakama は婦人にとって災いを招くとされている果物で、食べれば父が死ぬ、食べなければ母が死ぬ)と、おいらってえどうすべえ! くら、誰や、あちらで立てればこちらで立たず、こちらで立てればあちらで立たずなんていってる奴は。

「全く度し難い奴だ」“Bagai air di daun talas.”(芋の葉の上の水滴のように御し難い)とののしってみても、所詮「馬の耳に念仏」“Tebal telinga”(耳を貸さず、非難されても平気である恥知らず)だ。“Bagai air di daun talas.”または“Air di daun keladi.”は「女心と秋の空、又は男心と秋の空、(どっちでもいいけど)」にも使えるよ(念の為)

世に評論家は多い。実際「言うだけなら誰でも出来る」。インドネシアでも“Kalau hanya bercakap, semua orang juga dapat.”(意味は日本語と全く同じ)という。また「言うだけなら易しいこと」“Mudah menggerakkan bibir.”(唇を動かすのは簡単)とか“Berani pegang, berani tanggung.”(縄張り持つな

ら、責任をもて = 言うだけでなく、実行して欲しいものだ)ともいう。さらに「言うはた易く、行は難し」と古くから言われているが、インドネシアでは“Lidah tak bertulang.”(舌には骨が無い = 気安く請負うが実行しない)と戒めている。

人はとかく自分が見えないものである。古人曰く「人の振り見て、我が振り直せ」と。インドネシアにも人はいるもんだ。“Udang tak tahu akan bungukunya.”(えびは自分の背中が曲がっていることに気がつかない)と注意を喚起している。そうです、あまり自分勝手に“sesuka hatimu”ばかりしていると、「お里が知れますよ」“Sebab buah, dikenal pohonnya.”(実を見れば、木が判る)だ。

ゴルフをしていて、特にビギナーによくあるのが、「一難去って又一難」だ。腹の立つことにインドネシアに將にゴルファーをあざ笑う表現がある。それは“Dari semak ke belukar.”(雑草からブッシュへ)と將に横で見られているような表現だ。

まだ“Berbukit dibalik pendakian.”坂を登ったと思ったら後ろに又丘がある)とか“Lepas dari mulut harimau, jatuh ke mulut buaya.”(虎口から逃れたと思ったら、鱷の口の中 = 1つの難を避けて、さらにより大きな難に会う)なら、下手くそゴルファーでも腹が立たないんだが。

まあ、こんな具合だから「奥さんに頭が上がらない」。“Selalu di bawah ketiak istrinya.”(いつもカーちゃんの腋の下 = 頭が上がらない)んだよね。

そうは言うけど、まだまだ諦めちゃ駄目だよ。あなたはまだ「海のものとも山のものともつかぬ」“Masih di awang-awang.”(まだ雲の中)だから。

間違っても先生に「恩を仇で返す」“Campak bunga dibalas dgn campak tahi.”(花を投げたのに、糞を投げ返される)ようなことはしないように。